

## 書 評

タミム・アンサーリー著 小沢千恵子訳

## 「イスラームから見た『世界史』」

紀伊國屋書店（2011年9月）

(Tamim Ansary, *Destiny Disrupted: A History of the World from Islamic Eyes*, Public Affairs, 2009, 416pp)

中 西 久 枝

本書はアフガニスタンで幼年期を過ごし、その後アメリカに渡ったイスラーム教徒によって書かれたイスラーム史の本であり、英語で書かれた本の日本語訳である。アンサーリー氏は、2000年秋に米国で高校の世界史の教科書の編纂にあたり、現存の世界史の教科書では、イスラーム世界に関する記載が圧倒的に少ないことに気づき、それが本書を書く動機づけになったと言う。

私は、1980年代半ば、博士課程の大学院生として米国に留学していたが、学部の教養科目の一つであった「西洋文明史」という科目を教えた経験がある。その当時使用されていた教科書が、古代エジプトの歴史も西洋史の一部として位置付け、また十字軍については、文明化していない「野蛮な」イスラーム教徒からエルサレムを「奪回した」西洋の武勇伝として描いていたことに、かなり違和感を覚えたことがある。欧米でのイスラーム史が、いわゆる西洋史の立場から歪められてきたことは、1980年代初頭、エドワード・サイードの名著「オリエンタリズム」において指摘されている。留学前に「オリエンタリズム」を読んだ私は、米国では教育の現場においても一種のオリエンタリズムが横行している現実に突き当たったのを記憶している。その意味で、筆者のアンサーリー氏の本書の動機付けには個人的に共感を覚えた。

本書の題名は「分裂の宿命」(*History Disrupted*)である。訳書としての題は、「イスラームから見た『世界史』」となっている。本書が取り上げる時代は、イスラームが誕生する前史から冷戦の終結までである。また地理的領域としては、北アフリカ、バルカン半島を含む東・南地中海から中央アジアにかけてのイスラーム世界の歴史が中心となっている。その意味では、私たち日本人にとっては「イスラーム史」の本である。

しかし、「イスラーム史」とは訳さず、あえて「イスラームから見た『世界史』」と題するところに、訳者の著者への配慮が感じられる。著者は、「はじめに」の部分で、本書は専門書でも教科書でもなく、物語であると言う。しかも、それは、

ムスリム（イスラーム教徒）の多くがこれまでの歴史をこんなふうと考えているという「世界史」を、逸話を入れながら語ったものだと前置きしている。つまり、ムスリムから見た世界史は、当然ながら、イスラームがおこって以来、帝国や王朝などさまざまな形をとって繁栄し分裂しやがては現在のように「停滞」している「イスラーム世界」のできごとを中心に構成されている世界なのであり、それが彼らにとっての「世界史」だというわけである。

著者は、いわゆる中東という用語を最初から排除する。それは、西欧から見た地理的区分であるからであり、著者はあえて「ミドル・ワールド」という言葉を使っている。ミドル・ワールドは、「中央アジア、イラン高原、メソポタミア、エジプトを結ぶ陸路の結節点」を指し、地中海世界と中華世界のあいだにある世界だという。欧米や日本では、イスラーム世界とはどこを指すかという説明で、「ムスリムが多数居住する地域すべて」を指すとされている。そうした地域が欧米にあったとしても、一般にはそう位置付けられることが多い。しかし、著者は、「ロンドンやパリにムスリムが住んでいればそこもイスラーム世界の一部だと捉える」のは、誤解を招くだけではないかと暗に反論している。著者が「ミドル・ワールド」と地理的に捉える場所には、独特の世界が広がり、そこにはムスリムが紡いできた物語（歴史）があるという立場がそこにはある。

本書は、17章で構成され、注と索引を入れて685ページもある力作である。この超大作は、歴史の信憑性とは何かという論争を吹き飛ばす力を秘めている。むしろ、上述のように、本書は、歴史の信憑性やこれまでの歴史解釈上の論争などとは無関係のところ、**「ムスリムは世界をこのように理解してきた」という立場で、ミドル・ワールドを描いているのである。**では、アンサーリー氏の描くミドル・ワールドの歴史の本は、これまで出版されてきたイスラーム史の本とはどこが違うのだろうか。

歴史の記述や歴史の語りは、たいていの場合、それを書く者の立場を反映する。歴史的に争点となっている史実については特に一定の立場に立脚することが多い。本書の特徴の一つは、一つの立場に著者が立脚するというところが全体的に少ないという点である。

いわゆるイスラーム史において、研究者のあいだで争点となっている史実がいくつもある。そのひとつが、スンニー派とシーア派の分裂の起源に関わる問題である。両派の違いは、預言者ムハンマドの死後の後継者として誰が正統であるかという違いから派生したと一般には捉えられている。しかし、本書では、「ムハンマドの死後、その後継者が問題になったとき、それを決める会合にアリーを信奉する人たちもアリー自身もたまたま居合わせなかったゆえに、アブーバクルが第1代カリフになったのである」といった書き方をしている。すなわち、「両派

の違いは、教義の違いではなく、預言者ムハンマドとアリーにどれだけ神性を見出ししていたかという人々の認識や感性の問題からおこったのだ」と、著者は語るのである。歴史がどのような軌跡を辿るかは、偶発的な事件やその当時の人々の感情や感性によって決まるという主張がにじみ出ている。こうした点に、著者が本書で意図している「歴史は血の通った人間ドラマ」（p.28）という、本書の特性が表れている。

書き手が誰であるかによって、歴史の著述が変わるという点においては、パレスチナ問題もそのひとつである。パレスチナ人というムスリムの立場から問題を論じるのか、ユダヤ人としてシオニズムに立脚して論じるのかによって、問題の本質がどこにあるかが異なるのは言うまでもない。ところが本書では、パレスチナ問題について著述をするとき、著者は、ユダヤ人、パレスチナ人のそれぞれの主張をほぼ等分に紹介することによって、いずれの立場にも味方しないという立場をとる。アンサーリー氏は、パレスチナ問題は「折り合いのつくはずのないたいへんな問題である」と簡単に書いている。そして著者は、現在のパレスチナ問題は強いて言えば、第一次世界大戦期のイギリスの両者への騙しのせいだと結論づけることで、パレスチナ人、ユダヤ人のいずれもが被害者であると描くのである。

このように本書は、パレスチナ問題の歴史解釈に象徴されるように、歴史的事件の解釈をめぐるひとつの立場に固執しない傾向があるが、例外もある。たとえば第1次世界大戦中のトルコによるアルメニア人虐殺事件をめぐる著述である。トルコ政府はこれまで一貫して虐殺事件はなかったと主張する一方、欧米諸国の多くはアルメニア政府側の立場に味方し、虐殺は実際におこったと主張している。著者は後者の立場を取っているが、こうした見解が著者のどのような立場から来るものなのかは、明らかではない。（著者が前書きで書いているように、「そのようにムスリムは一般的に世界を理解しているのだ」という著者なりの考えであると言えればそれまでではあるが。）

西洋史観とイスラーム史観の違いがよく表れる歴史的イベントの中に、十字軍がある。十字軍についてのアンサーリー氏の著述は、また独特である。アンサーリー氏は、イスラームの始まったメッカ、ムハンマドがイスラーム共同体を築いたメディナ、ウマイヤ朝の首都であったバグダードにも、ペルシア文化圏の領域にも、十字軍は来襲しなかったと指摘し、それゆえに「十字軍はヨーロッパ文化の影響をイスラーム世界にはまったく及ぼさなかったのだ」と書いている（p.285）。前述のように、西洋史では、西欧の十字軍がエルサレムを「奪回した」ことを西欧世界の騎士団の英雄的イベントと描く潮流が過去には多かった。しかし、アンサーリー氏は、十字軍はムスリムの目からはそれほど重要なできごとではなかったとさら

りと書いている。著者は、「十字軍がもたらした最大の歴史的影響は、ヨーロッパ人の商人が、エジプトやレバノンなどのある地中海地域のみドル・ワールドとの交易を拡大したことであり、ミドル・ワールドの豊かな香料や綿や織物を得られるようになったことである」と指摘する。

すなわち、ムスリムにとっての十字軍は災厄のひとつだったが、かといってその影響は限定的だったという解釈を展開することで、著者は、西洋史が十字軍を歴史的な大事件と捉える立場を揶揄しているのである。こうした記述は、欧米の歴史研究家たちにとっては、肩すかしであるが、ここに著者の機知が感じられる。

本書は、グローバル化時代の中で国際社会が「ミドル・ワールド」のムスリムとどう共生していくべきかという現代的な課題についても、オリジナルな発想で語っている。そのひとつが、イスラーム法の解釈の問題である。いわゆるイスラーム復興主義は、現代社会においてイスラーム法を生活のあらゆる側面で適用させようとする運動として展開し、そうした運動は究極的には「イスラーム共同体」の復興であると言われている。イスラーム復興主義にはさまざまな潮流があり、イスラーム法の現代的解釈をめぐる歴史的に論争が絶えず、解釈のあり方についての見解も多様である。

著者は、「ムハンマドの生きた時代にのみイスラームの社会事業は発展と進化こそあったものの、ムハンマドの死後から現代に至るまで、そうした可能性はなくなった」と主張する。一般に、イスラーム復興主義者は「イスラーム共同体」を現代世界において再構築することは可能だと捉えるが、著者のこの主張は、共同体の復興のためのイスラーム法解釈などにはありえないという主張にも読める。また、ヨーロッパ社会でこの十年間特に社会問題となっている問題として、ムスリム女性のスカーフ問題がある。これはイスラーム世界において女性の地位をどう捉えるのかという問題とも関連している。本書では、イスラーム世界における女性の地位がより男性に従属的になったのは、社会的・政治的分裂の激しいアッバース朝後期以降であると、興味深い解釈が展開されている。アンサーリー氏は、ムスリム女性の地位の低下の問題は、社会の多様性への許容能力の問題だと捉える。倫理的、道徳的な事柄で白黒つけられないグレイゾーンを認めることができれば、人間は多様性を認め合うことができるが、混乱したアッバース朝時代には、人々は余裕がなくなり曖昧さを排除する傾向が出てきた、と言う。イスラームの初期時代にはスリム女性が公的領域においても一定の役割を担っていたが、社会的分裂が激しくなるにつれ、人々が極端に走るようになり、女性の公的領域での貢献に対しても厳しさが増したと、語っている。

こうした主張は、時代のカオス性と人間心理の関係から来るものだという俗っぽい発想から考えれば、うなずける面もある。しかしながら、現代のムスリム女

性は公的空間から排除されているという認識（そう認識するかどうかもムスリム女性のあいだでは多くの議論があるが、仮にそうであると認識したとして）が正しいとしても、それがどのようにして現代に至るまで継続したのか、あるいは断続したのかという点については、ほとんど説明していない。アンサーリー氏が本書の最初で断っているように、この本が「ムスリムは世界をこんな風に理解している」という語りであるとわりきったとしても、実はどこまでが筆者の憶測によるものなのか、どこまでがすでにムスリムのあいだで共有されているものなのかと、読んでいるうちに疑問がわいてくる。

歴史がヒストリー（his story-history「物語」）であるとすれば、恐らく本書は、紛れもなくアンサーリーという著者の考えるイスラーム史という物語なのだと決めて読めばそれでよいことかもしれない。その物語たる面は、本書の最初から最後まで、きわめてアンサーリー氏の個人的な関心事と観点によって彩られている。たとえば、中東の中世から近代に至る時代を著述するとき、3つの帝国すなわちオスマン・トルコ帝国、サファヴィー朝ペルシア、ムガル朝インドの3つがほぼ同時代的に存在した時代があったことが著述されるのが普通である。しかし、本書ではムガル朝についての言及はほとんどなく、またサファヴィー朝ペルシアに比べ、オスマン・トルコ帝国の記述はきわめて多いという偏りがある。それは、筆者のもつ知識の偏在性によるのか、あるいは無意識に、近代の「イスラーム史」をヨーロッパ史との接点が多いオスマン・トルコ帝国に注視する傾向が著者の歴史観にあるせいなのか、読み手の判断に任される部分であろう。

このような取舍選択的なイスラーム帝国の取り上げ方の偏りは、著者が米国で本書を書いたという背景から来ている可能性もある。本書を書く動機づけが、世界史の中にミドル・ワールドに関する記述が著しく乏しいという厳然たる事実から来ているとすれば、それは言い換えれば、欧米で世界史として著述されるのは、著者の観点からはヨーロッパ史に近い世界史であろう。そうしたヨーロッパ中心主義の立場に対抗して、本書が書かれていると考えるならば、著者が読者として想定しているのは、ヨーロッパ史に精通した人々ということになる。本書には、ヨーロッパ史の史実に喩える記述が多いが、それも、そうした面を反映している。しかし、本書のそうした面がミドル・ワールドの歴史を見る上で新鮮な視点を提供している点も看過できない。たとえば、10世紀の中央アジアのトルコ系民族（蛮族と筆者は書く）の躍進については、「かつてヨーロッパでゲルマン族がライン川を越えてローマ帝国領に侵入したように、蛮族が（アッパース）帝国北部の国境を越え始めた」と書いている（p240）。このような著述方法により、ミドル・ワールドの人々の移動の物語が、ヨーロッパのそれと連想され、ミドル・ワールドの世界をよく知らない者にも身近なものに伝わってくるのではないだろうか。

本書は、現在の「アラブの春」と呼ばれる政治・社会変動を理解する上で貴重な視点をも提供している。一般にパレスチナ問題の紛争の火種は、アラブ、ユダヤ人、フランス人外交官とそれぞれに領土を分け合うことを約束した「イギリスの3枚舌外交」にあると言われている。著者は、アラブと言っても預言者ムハンマドの血筋を継ぎマッカ（メッカ）を守るハーシム家（ヨルダンの王家）とアラビア半島中央部を支配していたサウード家（現在のサウディアラビアの王家）の利害が異なっていたことを指摘している。その上で、両家に対する英国の約束も別々であり、それが現在のミドル・ワールドの複雑さを生み出していると示唆している。さらに著者は、パレスチナやシリアでのアラブ民族主義の動きには、オスマン・トルコ帝国とヨーロッパ列強からの独立という側面と、ハーシム家とサウード家からの独立という側面の二面性があったと述べている。現在のレバノンやシリアの政治体制が、中東に多い王政国家とは異なることのルーツがこうした視点からも浮かび上がる。その意味で、本書は、現在中東で進展している政治・社会変革の課題を理解する上で一助となる。

本書は、アラビア語、ペルシア語、トルコ語による人名や地名などが無数に使用されている。訳者はその転記に際し、原語にきわめて近い発音になるように気を配っている点が訳者としての専門性に徹した姿勢が窺える。また本書は、訳書でありながら、自然で流れるような日本語で書かれているため、著者の意図する「物語」性が高く、読みやすい好著である。